

ICD フィリピン部会との交流報告

このたび国際交流委員会では、ICD フィリピン部会と GC アジア社が協力して開催する歯学生及びフェロー向けのセミナーと、長年 ICD フィリピン部会が取り組んでいる山間部での歯科健診ボランティア事業に視察参加して参りました。非常に有意義で楽しい旅程だったので、ここに報告させていただきます。

1. 2024年10月4日(金)

マニラの玄関であるニノイ・アキノ国際空港は、各ターミナル間の移動にタクシーを使った方がよいとされるくらい巨大です。午前 10 時 30 分、小野と秋山フェローはそこで落ち合い、その後宮崎フェローを迎え直接イースト大学に向かいました。



<UE でのセミナー>

イースト大学は、東京でいえばお茶の水界隈のように、たくさんの大学・歯科大学が集まる地域に存在する総合大学です。午後から宮崎国際理事が合流し、いよいよセミナー開始です。トップバッターの Irene 先生(インドネシア:ジャカルタの歯科医師)は、口腔細菌が及ぼす全身疾患の影響について最近の論文を多数引用され、講演されました。印象的だったのは、「これからの歯科は忙しくなりますよ」と期待に満ちた警鐘を鳴らされていることでした。今の日本の状況もよく御存知のようでした。



そして宮崎国際理事からは、接着をテーマに多岐にわたる症例を交えての講演でした。素晴らしいケースプレゼンテーションに会場は嘆息と嬌声に包まれていました。

イースト大学の歯学部の学生は7～8割が女子だそうで、この日も女子大学かと思われるほど巨大な階段教室は女子学生で溢れていました。女三人寄れば姦しいといいますが、ただでさえ若者のエネルギーが集積している大学において100人以上の女子大生が所狭しと集まった教室は、筆舌し難いほど巨大なエネルギーの集合体と化していました。私たちも久々に元気の源をいただいたようで、とても清々しくはつらつとした気分になれることができました。

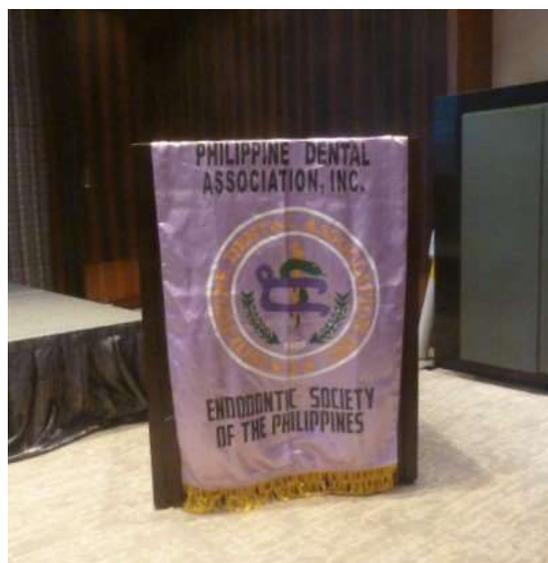


2. 2024年10月5日(土)

フィリピン2日目は、ICD フィリピン部会主催のフェロー向けセミナーが開催されました。会場は、日本でいえば銀座のようなマニラの高級商業地域に建つ [Marco Polo Ortigas Manila](#) という高級ホテルのバンケットホールです。素晴らしいロケーションでかつとてもクリーンなホテルでした。

演者は昨日同様、Irene 先生と宮崎フェローです。内容は昨日の学生向けのものから歯科医師向けのプロフェッショナルな内容へアップグレードされており、私たちも大変勉強になりました。午前中は Irene 先生のセッション、そしてバイキングのランチを挟み、午後は宮崎先生のセッションと進行されましたが、驚いたのは主催者が ICD フィリピンだけでなくフィリピン歯科医師会とフィリピン歯内療法学会の三者という共催形式だったことです。参加者は ICD フェローだけでなく、フィリピンの全歯学部を代表する先生がたが一同に会していたことがとても印象的でした。そのことをICD フィリピン部会の Ida Vloria 会長にお尋ねしたところ、「各団体の垣根を取り払うことは大事です。向かっている方向は一緒なので、競合することはありません」とお答えになられていました。他団体との共催については、私たち日本部会のメンバーにとって目から鱗が落ちるような示唆を与えてくれた気がします。

こうして2日間にわたるセミナーは、無事、盛会裡に終わりました。

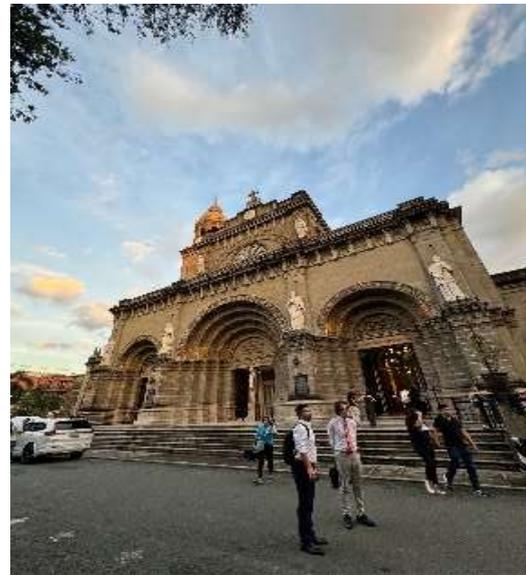




セミナーが終わり夕食までの間、GC フィリピンの御厚意により、スペイン統治時代の古い街並みが残るイン
トラムロスという街に連れて行っていただきました。ここは中世のヨーロッパの城郭都市がしっかり保存されて
いる歴史地区。1607年に建立されたサン・アグスティン教会をはじめネオロマネスク様式の巨大なマニラ大聖
堂など、見どころいっぱいです。

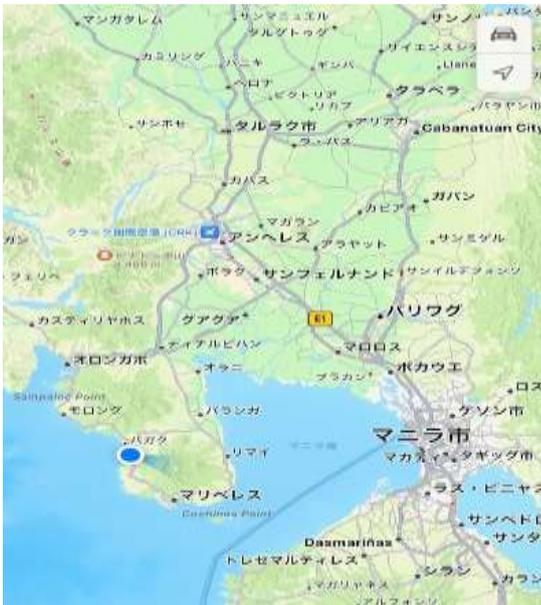
日本では城郭都市を体験することはできませんが、ここではまるで中世ヨーロッパの小都市に迷い込んだよ
うなお伽話の世界を体験できます。17世紀の欧州にタイムトラベルできる名所が日本からこんな近くにあった
なんて、とても新鮮な驚きでした。





3. 2024年10月6日(日)

フィリピン視察旅行の最終日です。ICD フィリピン部会が長年継続しているボランティア活動に同行しました。朝 5 時 30 分にロビーに集合し、目的地である Bagac Bataan という村にバスで向かいます。アメリカのようによく整備された高速道路(ハイウェイではなくスカイウェイと呼ばれています。)でも4時間の道のりでした。マニラとはマリラ湾を挟んだ対岸の半島中央部に位置する、漁業を中心とした村の一角にその地はありました。



到着した居住地は 30 数世帯が暮らすコミュニティでしたが、驚いたことにその広大な土地は、フィリピン部会のあるフェローが所有する山の一部を開墾したものとのことでした。そして住民が暮らす住宅はすべて ICD フェローの寄付により建てられており、今なお、新規の建築が進んでいました。想像していたようなボランティア活動とは全く異次元の空間と活動内容に私たちは驚愕いたしました。

到着後すぐに住民達への口腔衛生指導と口腔衛生器具の配布が行われました。それと並行して子供達の歯科健診がユニット1台のみの小さな診療室で行われていました。都会から遠く離れた辺鄙な山間部の部落なので、さぞや子供達の口腔衛生状態は悪いだろうとの予測は見事に裏切られました。近隣で開業するICDフェローのドクター数人により毎月定期的に巡回診療が行われており、子供達の口腔内にはほ

とんどカリエスがなく、当日は健診とフッ素塗布のみで終了する患児ばかりでした。

無事、午前中の活動が終わり、ランチタイムとなりました。貧しいながらも精一杯私たちをもてなそうという純粋で清らかな心がこもった焼き出しのビュッフェに、私たちはとてもとても感動いたしました。

ホテルに戻り、鈴木フェロー、秋山フェロー、小野の三名で今回の視察についてプチ反省会を開きました。結論としては、国際交流委員会として今後ともフィリピン部会との交流を継続していきたいという思いで三人の意見は一致したのです。





4. 視察を終えて

<小野清一郎>

私にとっては20年ぶりのマニラでしたが、この20年間の発展ぶりには目を見張るものがありました。私たちの宿であるヒルトンホテル界隈は、すっかり先進国の都心と変わらない雰囲気でした。そして最も大きな驚きだったのが、英語の常用化でした。例えば街に溢れる数々の看板について、20年前はタガログ語のものと英語のものが半々に混在した記憶がありますが、今回の滞在中、タガログ語の看板はとうとう一枚も見ることができませんでした。街の看板が全て英語表記であり、植生が熱帯特有の異国情緒溢れるトロピカルな様子だったことで、まるでハワイに居るような錯覚すら覚えました。

そして初日に訪ねたイースト大学の教員及び歯学部生達は、講義だけでなく日常会話に至るまですべてにおいてネイティブな英語でコミュニケーションしていました。これには日本の英語教育を省みて、焦燥感を禁じ得ませんでした。

結論として私は、このプーチ・ハワイのような日本から最も近いネイティブイングリッシュ圏であるフィリピンという島国を改めて好きになりました。是非とも来年のフィリピン部会の総会・認証式にも出席させて頂こうと心に誓ったのでした。

<秋山逸馬>

2020年の日本で開催されるべき100周年記念はCovid-19の為に開催する事が出来ませんでした。この100年の歯科医療の変遷と今後の100年後に私たち歯科医は如何変わっていくのだろうか？という事を考えた時、ICDの創設者であるDr. Ottofyが自ら22年滞在したフィリピンの今の歯科医療・歯科医学は如何になっているのか？そしてもう一人の発起人である奥村鶴吉先生の後進である我々日本部会との関連を調べてみようと思いました。立場上南アジア各国の方々と接することが多く、スタッフとしてもフィリピン人を雇用したこともあり多くのフィリピン人スタッフは陽気で歌が好き、しかも歯科大学卒業ということもあり非常に優秀であったため退職した現在でも親交があります。日本でもスタッフ確保が大変と聞く昨今、先月にはインドネシア外相が「年間2500万人の医療人材」を日本へ送りたい旨、ライセンス承認の交渉を始める事(EPA 人材案件)を発表されています。フィリピンは古くから「世界の看護婦輸出国」と称され Covid-19 で亡くなった各国の看護師の多くがフィリピン医師免許を持つスタッフと云われます。本文中にもある通り、フィリピンの歯学部生は女性が多く愉しく目を輝かせながら歯科医を目指し勉強しています。またフィリピン部会の先生がたもセミナーでは積極的に質問し、日々の診療に反映させようとしています。現状の日本の政策を考えると遠くない将来、外国の医療人材を受け入れる時代が来るかもしれません。そうなる外国人材がどのような教育や訓練を受けているか？この度はフィリピンでありインドネシアとは多少異なりますが、現地の事情や文化を知っておくことも未来の糧になるかと思ひますし、今回大変お世話頂いたフィリピン部会会長の Ida 会長が言っていた「垣根を取り払い、同じ方向を目指す」ことの大切さを感じます。来年も歯学部生の生き生きした笑顔を拝見し、私自身にも元気が貰えるよう交流を頑張ろうと思ひます。

(文責 小野 清一 、 秋山 逸馬)